太陽の国メキシコへの派遣
～在外教育施設での3年間の軌跡～

前日本メキシコ学院日本コース　教諭
旭川市立東町小学校　　教諭　木　村　伸　一
（派遣期間　2010.04　～　2013.03）

1　はじめに

日本メキシコ学院日本コースは，前身のメキシコ日本人学校とメキシコの現地校が合わさり同じ敷地内に開院した学校である。２０１３年現在，日本コース約１２０名，メキシココース約７００名の児童生徒数を誇る。この児童生徒数により，施設面では温水プールやトラック付きのカンチャ(グラウンド)などがあり充実している。カリキュラム面や文化・風習等，両コースの違いが様々ある中で，文化センターや日本語教育部が両コースをつなぐことにより，授業交流や文化交流が試行錯誤の中で進められている。

日本コースは，小学部が各学年１０~２０名程度，中学部は５~１０名程度で，すべて単学級である。派遣教員数が年々減少しており，現地採用教員を増やすなど，他の在外教育施設と同様のことが起きている。そのような環境の中で，様々な教育課題や児童生徒の能力の向上，保護者の要望などに対して，あらゆることに取り組んだ３年間であった。

2　メキシコ並びにメキシコシティの概要

＜メキシコ＞

国名	メキシコ合衆国（Estados Unidos Mexicanos ｴｽﾀｰﾄﾞｽ･ｳﾆｰﾄﾞｽ･ﾒﾋｶｰﾉｽ）
首都	メキシコ・シティ（ 海抜 2,240 ｍ）
通貨	ペソ（１ペソ→７．６円前後　１ドル→１２．８ペソ前後）
人口	約１億７００万人
国民	ﾒｽﾃｨｰｿ(スペイン人とインディヘナの混血)約80%，ｲﾝﾃﾞｨﾍﾅ(先住民族)約10%，スペイン系を中心とした白人約10%と推定される。日系人は約15,000人以上といわれる。
宗教	ローマ･カトリックがほとんど。
経済	石油産業と観光業が外貨獲得の中心。
言語	スペイン語（メキシコ市内では，英語はあまり通じない）
気候	「常春の国」ともたとえられる。年間を通じて，温暖で湿度の低い快適な気候。
時間	メキシコではサマータイム制度が導入されており，毎年4月第1日曜日から10月の最終日曜日まで，１時間，時刻が早くなる。(時差－15時間，ｻﾏｰﾀｲﾑ－14時) 日本時間午前９時は，メキシコ時間前日午後６ 時（ ｻﾏｰﾀｲﾑ時前日午後７時）

＜メキシコシティー（D.F.）＞

名称	メキシコ連邦区(Distrito Federal)，通称 **D.F.**と呼ぶ。
人口	2,200 万人
市街状況	名実ともに中南米を代表する経済規模を持つ。中心部にはメキシコの大企業の本社のほか，ヨーロッパやアジア，アメリカの多国籍企業のオフィスが林立。また，地下鉄網，高速道路，環状道路，オフィス街やファッション街，高級デパートなど近代的都市機能を十分備えた大都市である。
交通	市内はバス，メトロバス，地下鉄の路線網が発達。またタクシーが市民の足として重宝されている。市内の多くの個所が慢性的に渋滞している。
航空	メキシコ・シティ国際空港（別名，ベニート・フアレス国際空港)。アエロメヒコ航空が成田からのノンストップ直行便を運行（最短 13 時間)。復路は，ティフアナ経由の直行便がある。その他，A.A と UAL に，アメリカ経由の乗り継ぎ便がある。
	メキシコシティの標高は 2240m。典型的な高山気候。亜寒帯気候にも似ている。

気候	雨季と乾季があり，雨季は５月～10月頃で夕方スコールがある。乾季にはほとんど雨は降らない。紫外線は強く，帽子，サングラス，UVクリームがあった方がよい。内陸に位置するため，朝夕，かなり冷える。また，１０月～1月は日中も多少冷える。

３　メキシコ生活

治安上の問題があるため，大使館からの安全講話や職場でのオリエンテーション等，何重にも気を付けて生活するようにしていた。

＜自分･家族の安全のために～メキシコで犯罪に巻き込まれないための対策～＞

・夜間に不必要に外出しない。(夕方以降の一人歩きは厳禁)
・自動車に盗難防止の処置を施す。(ハンドルロック等，多数売っている)
・治安の悪い地域に近づかない。(特に夜間の市内中心部近辺)
・人に見られるところで財布を開いたり，人に見られやすい ATM でお金を下ろしたりしない。
・路上駐車をさけ，屋内の駐車場へ車を止める。※学校内にＡＴＭがある。
・人混みの中に入らない。道を歩くときは後ろや周囲を確認するなど気を配る。
・子どもの手を引いて買い物をする。(大きい子の場合でも目を離さない。)
・公共交通機関を使わず，自家用車を使う。
・流しのタクシーには乗らない。(無許可のタクシーは市内に 12,000 台あるらしい。)
　特に夜間のリブレの運転手による強盗がしばしば話題に上る。
・土地に不慣れなことが他人に分かるような様子（地図を開くなど）を見せない。
・家の出入り口の鍵は，２つまたは３つ付ける。(既にそうなっている)
・通勤経路や通勤時間はできるだけ一定しないようにする。
・レストラン，ホテルで椅子の背もたれなどにバッグをかけない。貴重品から目を離さない。
・多額の現金はできるだけ持ち歩かない。
　※金銭の要求をされる犯罪に備え，常時５００～１０００ペソの現金を身につけておく。

＜メキシコ料理＞

メキシコ料理と言えば，辛いというイメージがあるかもしれないが，必ずしもそうではなく，サルサ（唐辛子のソース）が数種類あり，辛さを好みで調節できる。タコスなどは市民の日常食として，街角で売られているし，古くから伝わる地方特有の料理も食べられる。

日本食については，お米をはじめ日本食材（多少高いです）が手に入るので，ほぼ日本と同じような食生活ができる。日本食材は，スーパーマーケットでも少しは売られているが，日本食材専門店があるので，そこで購入。夏になると松茸が安価で出回る。

メキシコ・シティは高地で沸点が約 92 ℃と低いために，ご飯は圧力炊飯器で炊くのがベスト。メキシコの水道水はそのままでは飲めない。(タンクの錆や汚れ等のため。歯磨き程度は大丈夫。) 飲料用，調理用には，市販されているペットボトルかガラフォン（２０Ｌ入りのタンク）の水を使う。

レストランは，メキシコ料理はもちろん，日本料理，アルゼンチン料理，中華料理，韓国料理，イタリア料理，フランス料理など豊富にある。日本料理店では，お寿司，うどん，焼き鳥，天ぷら，カツ丼，豆腐，鉄板焼きなどのメニューもあるが，とても高い。

４　日本メキシコ学院日本コースの概要

(1)学院設立の経緯と建学の精神

＜経緯＞

「日本メキシコ学院日本コース」の前身は，1968（昭和 43）年５月に幼稚園・小学校あわせて 50 名で発足した「メキシコ日本人学校」である。メキシコ市内デルバジェ地区にあった学校は，入学希望者の増加によって敷地と校舎が手狭になり移転問題がクローズアップされた。1974（昭和 49）年５月，メキシコ合衆国のブラボ・アウハ文部大臣が日本を訪問し，当時の奥野文部大臣と会談した際，日本・メキシコ両国の子どもたちが同じ敷地内で学べる本格的

な国際学校「日本メキシコ学院」の設立が提唱された。その年の９月，メキシコ合衆国を訪問した田中首相とエチェベリア大統領との会談の結果発せられた共同声明において，早期開設を支援する旨の発表があった。永年にわたって学院建設を熱望していたメキシコ進出企業と日系コロニアの献身的な努力が実り，ついに 1977（昭和 52）年９月に，現在の「社団法人日本メキシコ学院(LICEO MEXICANO JAPONES，A.C.)」が誕生した。本学院は，日本コース・メキシココースの２ コースと文化センターの３つのセクションから成り立っている。

日本コース	小学部・中学部があり，日本国文部科学省の定める学習指導要領に準拠した教育を行うとともに，スペイン語・英会話・メキシコ理解学習を実施している。新年度は４月から始まり学校週５日制，二学期制をとっている。
メキシココース	幼稚部・小学部・中学部・高校部があり，メキシコ合衆国文部省の定める学習指導要領に準拠した教育（ 高校部においては，メキシコ国立自治大学の進学基準に準拠した教育）を行うとともに，日本語・日本文化の学習も行っている。新年度は８月下旬から始まる。
文化センター	両コースの中心に位置して架け橋的な役割を果たしている。国際交流室，広報室のセクションに分かれ，両国文化交流の促進を図った交流授業や合同運動会などでは，通訳や練習の調整などもしている。

＜建学の精神＞

設立当時からの基本理念である建学の精神「日本・メキシコ両国民の相互理解の増進と教育文化の交流を図り，人類の連帯感を育み，世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな，かつ，国民にとって有為な人材を育成すること」の実現を目指し，日本・メキシコ両国の園児・児童・生徒が，同じ敷地内で相親しみ，自国の文化をしっかりと学ぶことと同時に，異文化を学ぶ中で両文化の相違点にも気付き，お互いの国の文化を理解，尊重しようとする資質を身に付けると共に，将来にわたる友好関係を培っていこうとしている。

(2)特色ある教育活動～主なもの

＜総合的な学習の時間＞

在外教育施設の特性を生かした「総合的な学習の時間」の推進をめざし，小学部では「リセオタイム」という名称で，メキシコの現地学習が取り入れられている。中学部では，カサダヤ（母子施設）訪問やメキシコ調べ学習等を行っている。

＜学力補充指導＞

〈日本語補充指導教室〉小１～３の希望者を対象に言語補充を中心とした指導を行う。
〈進路路指〉　　中３の希望者を対象に進路指導のために，週１回補習を行う。

＜語学学習＞

〈スペイン語〉
全学年対象(週１～２時間)専任のスペイン語講師の指導のもとに行われている。習熟度別に，少人数で楽しく学習が進められている。

〈英会話〉
小１～３（週１時間)，小４～６（週２時間)，本校の教諭と英語講師によって進められている。

＜交流行事･交流学習＞

学院内では両コースが一緒に参加する行事が数多くある。進行や説明は，日本語とスペイン語の両方を使って行われ，両国の言語や文化に触れることができる。また，合同授業や遊びの時間などの交流活動の企画もある。さらに，週に１回メキシココースとの合同クラブも実施されるなど，両コースの交流を深めるための様々な取組が行われている。

(3)職員構成

2013 年現在，日本メキシコ学院日本コースに文科省から派遣されている派遣教員は，校長以下１３名。その他に，日本コース児童生徒の授業を担当する教師として，スペイン語講師３名，英会話講師２名，図書館司書１名，常勤講師２名，事務職員４名のスタッフがいる。

(4)校舎

校舎は小学部・中学部は別棟で，小学部は日本コース専用の建物がある。中学部はメキシココースと校舎を共有していたが，人数減により現在は小学部と同じ校舎に入っている。メキシココースの幼稚部・小学部・高等部の校舎があり，それぞれ別棟にある。

教室は日本とほぼ同じ。上履きと下履きの区別はない。体育館も運動靴で使用する。

(5)学院施設

主な施設は，食堂（カフェテリア），講堂（アウデトリオ），体育館，室内プール，運動場などがある。これらは，どれも日本コース小学部・中学部，メキシココース幼稚部・小学部・中学部・高校部が共有し使用している。従って，一見広そうに見える敷地だが，いろいろと調整をしなければならない面がある。

5　3年間の軌跡

毎年，年度末には現籍校へ派遣の現状報告をしていたので，その報告から各年度を振り返る。

＜1年目を終えて＞

こちらメキシコでは，3 月 11 日(金)が修了式離任式です。日本だと，春休みにその後の事務処理等作業が出来るのですが，帰任者がいますので，全ての作業がこの１１日で終わりです。例えば，通知票は２月末まで。要録は先週まででした。これには，時間的に厳しさを感じました。

また，１月末からは，新年度準備委員会が始まり，１２月の学校評価で出された様々な課題等について議論してきました。毎週の会議でその一員としてやれることをやってきましたが，その辺の進め方は東町で学んだことがとても役立っています。もう一つ，日本にはない大変なことがあります。新赴任者の受け入れ委員会です。昨年赴任する際は，自分が赴任者の代表として現地とやりとりをしたり他の赴任者との連絡を取っていました。今年は，学校側の委員長として新赴任者の赴任に関して夏ごろから準備をしてきています。年末までは，「赴任の手引き」や「学校紹介 DVD」の作成など。年明け後は，新赴任者が決まりましたので，住宅の確保や赴任後の受け入れの体制づくりについて委員会として進めてきました。中でも，住宅の選定は生活を左右する重要な要素ですので決めるまでに時間がかかりました。春休み中の大家さんと仲介業者に出した修繕等の最終チェックが予定されています。昨年はビザの関係で赴任が遅れたので，今年はそれがないように事務の方や管理職とも最大限の注意を払って準備を進めています。

このような中ですので，年明け後は，とても時間が過ぎるのが早いです。人的にも厳しい環境ではありますが，楽しんで仕事をしています。４月からは小学部長ということで，小学部経営を任されることになりました。在外の事情として，中学経験者の方が多いので，初めてこちらで小学生を担任することが毎年起きます。その先生の学級経営や教科指導等は，かなり大変なことが想像できるでしょう。また，派遣教員の人数が十分ではないので，それぞれの持ち時数を調節して対応するために，複数の学年に入って授業をすることもあります。僕も，４月からは小６，小２，小１の教科や TT，一番の難題は中２の数学を担当します。このような状況で，学部長としてどう対処して仕事をしやすい学校にしていくのかを考えています。春休みによい準備をして新学期を迎えられるようにします。

メキシコへ来て，まもなく１１か月が経つのですが，良い意味での充実感があります。未知の世界ではありましたが，生活してみると，メキシコ人の気さくな人柄と明るさのおかげで，日本とそう変わらない生活をしています。もちろん様々な制約があり，外出時は緊張感を伴います。車の運転は，慣れたとはいえ油断できないですし，かばんなども極力持たず，財布と携帯だけをポケットに入れて出かけるようになりました。メキシコシティの治安は悪くなっているのですが，常に家族で行動しますので，その分家族で過ごす時間を楽しんでいます。

土日は，時々学院の行事があり，家族全員で出かけます。そんな時は，打ち上げも家族一緒です。先日行われた送別会も全員参加で，帰任されるご家族全員から胸中を聞き，様々な思いが詰まっており，涙，涙の送別会となりました。日本に戻って必ず会えるわけで

はありませんので，やはり一期一会だと感じました。まだ２年あるのに，「あと２年かぁ。」という気持ちをもちました。限られた任期を，十分に楽しみ充実させて日本へ帰りたいと思っています。

楽しいこともたくさんありました。学院では，メキシコの年中行事に合わせた交流活動がありました。メキシコの独立記念交流，仮装した死者の日交流，クリスマスのナビダ交流。反対に日本文化交流もありました。２年生でしたので，アミーゴ音頭を踊ったり，節分で豆まきをしたりしました。（省略）

＜2年目を終えて＞

こちらメキシコでは，3月9日(金)が修了式離任式です。小学部の卒業式は８日（木)。中学部は，卒業を励ます会を１２月に行いました。その後，受験で日本へ戻ったりメキシコの現地校へ体験入学があったりと，中３の生徒はバラバラになっていきます。

派遣されて２年を終えようとしている今，１年前とは違った気持ちでいます。最後の１年を迎えること，３年目となり上の立場となること，共に議論し進めてきた３年目が帰任してしまうこと。ここに来て，３年という月日の短さを感じています。ここからは，すべてのことが最後になるんだと思うと，思い残すことのないように力を尽くしていこうと思い始めています。

今年度は小学部長でしたが，学部経営を進めるために，信頼関係の大切さを思い知らされました。時にはうまくいかないときもありました。進めていく中で，自分自身の人間性に立ち返ることもありました。しかし，生徒指導面でのトラブルがなく，学校評価等では保護者からの信頼も得られ，児童の健やかな成長に力を注げられたので，よい１年にすることができました。

次年度は，教務主任を任されます。それに併せて小１担任にもなります。本校ではこれまで兼任制は取られていなかったのですが，帰任者が多いことや様々な先生方の特性や専門性を生かす配置等からそういう人事となりました。非常に大きな責任を校務としても担任としても担うことになります。最後の１年ですので思い残すことがないようにやります。

こちらの教務は，併設されているメキシココースや学院全体との連絡調整が非常に多いのが特徴です。日本コースだけで物事を決めたり進めたりすることができませんので，計画性と配慮と，臨機応変さが必要になります。

メキシコに来てまもなく２年。こちらの生活が当たり前になりました。日本との違いにイライラとしなくなりましたし，こういうもんだという受容と寛容さの気持ちがもてるようになりました。「郷に入らば郷に従え」というように，ありのままに受け止めていくことで，メキシコの良さが発見できるようになりました。

メキシコ人はとても陽気で気さくで，おおらかな国民性があります。おおらかさがルーズさに感じるときもありますが，逆に日本が窮屈と思うときもあります。日々の体験から同じ物事や現象を見たときに，とらえ方や見方が広がったように思います。

メキシコは，麻薬組織と当局の抗争が激しく，数十人が殺害されたとか，刑務所から脱獄が起きたとか，警官が殺害された等々，アメリカとの国境近くでは危険なことも起きていますし，交通渋滞が多く運転マナーもよいとは言えない（ウインカーなしで２列目からの右左折，信号無視，ぶつかった後があちらこちらにある車 etc）ので，危ないと感じられる面がありますが，非常に魅力的な国です。

様々なサルサが使われるメキシコ料理。表現豊かに踊られるメキシカンダンス。トリオや８人グループでギターやトランペット，バイオリンなどをバックに歌うマリアッチ。カリビアンブルーとも言われるカリブ海と世界遺産（３１箇所）が点在する名所等々。メキシコシティは，中南米の拠点であり，日本とは４００年の歴史がある親日的な国です。

＜学部長としての仕事＞

小学部長として心がけたことは，どの学級も適切に指導がなされ，各担任の力が発揮され，児童と保護者の信頼を得られるようにすることです。そのために，学部会での計画立案，検討決定，決定したことの実行評価改善という業務だけではなく，学部通信を先生方向けに毎週発行し，学級の進め方や，保護者への適切な関わり，仕事へのスタンス，在外

での押さえどころ等を，１年目での経験を生かして発信してきました。ポジション的にも年齢的にもミドルリーダーとして全体を考えて進めていかなければなりませんでしたので，自分自身にとっても，よき気付きやまとめにもなりました。

＜小中連携の重要性＞

学校規模によりますがアジアにあるようなマンモス校以外は，児童生徒数が少なく，それに応じて派遣教員も少ないため，小中をまたいで教科等を担当することが起きます。今年は３学年４教科を担当しました。小２生活科，小６理科と図工科，中２数学科です。その他にも，TT として小１にも生活科と体育科で入っていました。反対に中学校教員も，小学部の担任をしていますし（初めてのことです），教科も理科や社会なども専科として教えています。持ち時数の調整からも，両学部があることからも小中の連携が非常に大切だと思いました。その中で小中の教員同士には，指導のあり方や発達段階に応じた関わり方の違いがありますから，それぞれの指導のあり方を共有し，良さや適切さを吸収していくことが不可欠になります。どちらかに片寄った指導や自分の日本でのやり方を通そうとすると，そこそこの在外に適した指導にはならないと思いました。

＜大きな流れに沿うこと＞

派遣期間は，基本２年，延長が認められて３年，都道府県によっては再延長で４年まで認められるところがあります。限られた任期の中で，学校体制として疑問に思うことやその時の先生方によっては，おかしいと思うこともあります。しかしながら，人が変われば学校が変わるといって，その時々によって大きく変わっては，派遣教員以上に長く住んでいる児童生徒や保護者には不信感をもたれてしまいます。それぞれの学校の変遷や進め方に沿って，大きく変えるよりも，一つ一つの活動を整理し充実成熟させていくのがいいのではないかと思いました。そのために，これまでの経緯を十分に踏まえ，校長の経営方針に沿って進めていくことが大切だと思いました。

＜3年目を終えて＞

＜3年目としての責務　教務主任として＞

(1)校長の経営方針を具現化した教育計画を作成し，確実に実行し成果を上げる。
(2)校長を中心とし，三役（教務主任，小学部長，中学部長）が核となり，組織的に教育活動が進むようにする。
(3)組織をまとめ，よい方向へ教え導くかかわりをもつ。
(4)派遣教員本人だけではなく，その家族へのケアをする。

＜在外での生活＞

安全への意識を最大限にして過ごした毎日です。また，今日起きたことは，明日全保護者が知っていると言っても過言ではない環境にあり，妻や学校へ通う我が子に大きな負荷がかかる場面が多々ありました。保護者の生の声を耳にするのは，教員よりも配偶者の方が多く，学校の批判，先生の中傷もあるのが現実です。教師の仕事で信頼を得ることが自分の家族を守ることにもつながります。

＜在外での1年のサイクル＞

それぞれの日本人学校によりけりですが，日本の伝統文化や各種検定などに力を入れた取組があります。学校だけではなく，日系社会との合同行事があるところもあります。各種行事が多くなりがちです。

4～ 7月　新赴任者が来て，生活や学校に慣れるとともに，足元を固める期間。

8～ 12 月　様々な行事があり，教師 1 人ひとりの力量が試されるとともに，発揮していいく期間。

1～ 3月　各取組の総まとめであり，結果責任が問われるとともに，次年度に向けた改善を図り，組織として方向性を明らかにする期間。

（省略～上記以外のことは，「７　在外の現状と心構え」にまとめた）

６　教育課程の充実と改善

(1)多様な教育活動の整理と位置付け

平成２３，２４年度の学習指導要領完全実施に伴って，４つの目指す児童生徒像を見直したことから，教育課程についてもそれに照らして位置付け，明確な価値付けを行った。そのために，校長の学校経営方針を受けて，前年度から改善に取り組んだ。即対応が求められる在外では，新年度が始まってからでは十分な改善を図ることはできない。前教務主任とも連携し，継続的な取り組みとなるよう熟考した。

様々な教育活動があるが，今日的な教育課題，児童生徒の現状と課題，保護者の要望等から重点項目を決め，各学部経営方針にも反映させた。校長の経営方針，学校の教育目標，目指す児童生徒像，具体的な教育活動，各学部経営や学級経営等，縦に横につながりをもたせて，すべての教育活動を展開していくことが大変重要であった。

(2)学校評価の活用

教育課程は計画である。その教育課程を実行し，適切に実行されているか評価改善することが大切となる。その評価の１つが，「学校評価」である。こちらは前年度に大幅に修正した。具体的な教育活動に照らした項目と学校経営や学級経営に関する項目に分けて，細分化した。

教育活動の内容～〈知〉学習　言語活動(表現)
〈徳〉あいさつや礼儀
〈体〉基本的な生活習慣　忍耐根気　健康維持体力向上
〈国際理解〉　受容尊重　交流授業交流活動　　等

学校経営の内容～教育目標　ニーズに応える教育活動　学力向上　生活習慣向上
健康安全　経営の発信　結果責任　環境整備　参観機会　接遇　等

＜分析活用の仕方＞

①学校経営全般について客観的に傾向をとらえ，今年度の取り組みの成果と課題を分析する。
②学年や学部ごとの傾向をとらえ，学部や学級の重点目標が達成されているか等，分析する。
③個々の児童生徒と保護者の相違点や共通点から，教師と児童生徒の捉え方について分析する。

アンケートには記述欄を設け，保護者から出た意見は全職員で把握し，必要な手立てを検討した。分析から得られた傾向や対応策を各学部，学級，授業レベルで改善を図った。

(3)教育課程推進の具体的な計画と実行力

在外教育施設は，様々な職員の集合体で，学校の教育目標達成のためにある程度方向を同じにして進めていくことが大切である。計画は緻密に，進捗状況に応じて臨機応変に実行し，成果を上げるために，教務主任として心がけたことが，以下のサイクルである。年間行事予定に照らして，実施計画の作成や提案時期を決め，３か月先を見通して準備した。計画が整っていることにより，事前の修正や中途の調整などにも対応できた。また前年度に次年度の方向性を明らかにしておくことで，同じ議論を繰り返すこともなくなった。

①計画立案～校長の経営方針から具現化し実施計画を作成する。
②検討修正～事前に校長と目的や内容を確認し，企画会（校長，教頭，各学部長，教務）にて各学部の立場からも意見をもらい検討し，必要に応じて修正する。
③周知徹底～職員会議や各学部会にて，全職員に知らせる。
④実行確認～計画を確実に実行し，進捗状況を確認する。
⑤反省改善～事後反省を出し，改善策をあげて次年度に送る。

７　在外の現状と心構え(上川管内国際理解教育研究協議会　派遣志望教員研修資料より)

＜3年間の校務分掌＞

１年目～小学部２年担任，教務部　**(即戦力，足場固め)**
２年目～小学部長(フリー)，教務部**(中核，1年目の経験を生かす)**
３年目～教務主任，小学部１年兼任**(経営，学部，教員など，全体を見渡す)**

＜派遣教員として求められる資質・能力＞

派遣前に行われる在外教育施設派遣教員内定者研修会では，在外で必要とされる様々なことについて講義される。その中には，派遣教員としての心構えや求められる教育等についての講義がある。講義資料を要約すると，次の５点が上げられる。

①教育公務員として高い品位を保ち，任国の礼儀にも通じること。
②常に向上心を。任地の児童生徒，保護者などに応じた柔軟性が必要。
③教諭であっても，教育課程をデザインする力，経営や運営の視点が必要。
④個人プレーではなく組織的対応が不可欠。「協働する力」が必要。
⑤的確な情報を得て，学校の経営方針や児童生徒の状況を「発信する力」が必要。

これらのことを十分に理解し行動するためには，事前の心構えと任国に行ってからの職務の遂行や児童生徒，保護者とのかかわりから，早期に掴むことが重要である。

＜派遣を取り巻く状況～少ない教員数と様々な価値観＞

大規模校以外は小中学部併設がほとんど。現地採用教員もいるが，少ない人数で全ての教科をまかなわなければならない。できない，やれないという教員がいると，そもそも少ない教員でカバーするしかない。全国から集まる先生方の価値観は様々である。校種，年齢，経験など多くの違いがある中で，ともに進める努力をしなければならない。

＜児童生徒の特性＞

①治安的な問題による生活や行動制限と，それに伴う保護者依存。
②自分を鍛えたり高めたりする場が少ないことからくる様々な経験不足。
③日本人コミュニティや学校外の関わりの少なさに見られる狭い対人関係。

＜保護者の期待と要望＞

児童生徒の自立と学力向上を，期待している。日本人学校にかける期待は，とても大きい。期待に見合った教育活動の構築と仕事が求められる。

①自立心と学力保証　　②とにかく早いレスポンス

＜在外への心構えとは＞

「　志　」～誰のために？　何ができる？　何をしたい？
「覚　悟」～どんな状況であっても，やり抜く気持ちをもつ
「教師力」～①経営力　②授業力
「調整力」～①受容と尊重　②人間関係

＜在外で得られるもの＞

日本とは比べられないことが多々あるが，やはり「厳しさ」がある。「仕事の厳しさ」，「教育レベルに対する保護者の厳しさ」，「生活の厳しさ」等。そのような厳しさの中から得られるものがある。

①教育レベルへの対応等，児童生徒一人ひとりの実態や保護者の要望に応じた指導力
②異国での様々な経験を通した教師力　③国際理解で求められる豊かな人間性
④任国や近隣諸国に対する多文化理解　⑤日本人の良さ，国民性への再認識
⑥他都府県の先生との出会いと繋がり

8　おわりに

派遣期間中，大きな事件や災害に巻き込まれず，安定した教育活動を進めることができた。どこの国でも，何が起こるかわからない状況がある中で，大変恵まれた派遣期間だった。よき教えを与えてくれた先輩，職場の同僚，そして家族に感謝するばかりである。

３年目は，教務主任として小１担任として駆け抜けた１年であったが，年度末に在外での経験を含め教職経験２０年の一区切りとして，「学校評価データの活用の仕方」，「子どもの力を伸ばす学級経営」と題して資料を作成し，先生方に配付した。

派遣教員として求められる資質や能力を５点あげたが，日本とは違う環境に自ら志願して派遣されて行くのだから，向上心をもち真摯に取り組み，海外で暮らす子どもたちのために，どれだけ力を注ぐことができるかが大切であった。派遣された年齢，教職経験，教師としての専門性，それぞれの持ち味など，自分の何を発揮することができるのか。それを見つけ，自分の持ち場でやり切ることが，子どもたちのためであり自らのためにもなっていった。

在外教育施設は，派遣教員を即戦力として，常に成果を求めらるところである。生活環境や派遣者数減などの学校環境等，厳しい環境であるからこそ，より多くの熱意あふれる若い教師に，困難を伴うであろう異国の地での教育に立ち向かってほしいと切に願い，結びとする。